

---

アルナベルツ戦記 First Priority    世界の果てで響く終焉唱

優希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アルナベルツ戦記      F i r s t   P r i o r i t y      世界の果てで響く終焉唱

### 【Nコード】

N 3 4 3 7 Z

### 【作者名】

優希

### 【あらすじ】

クロムは父を裏切った者たちが嫌いだった。しかし、父の使いで嫌いなエルステイナに赴くことになりその末、世界を賭けた戦いに投じることになる

崩壊した城跡に少年と女性が訪れていた。

二人は廃城を見上げる。ここは北にあるベルマーレ大陸のエルステイナ城、二十三年前まで人々によって繁栄していた。しかし、最期の後継者を失い崩壊してしまった。

+

アルナベルツには四つの大陸と五つの種族が存在する。

南の大陸には神族のシュヴァンテ。

西の大陸には魔族のヴォルザクディオ。

東の大陸には聖族のリースリオ。

北の大陸には人族のベルマーレ。

最後は夜者、二十年前に起きた人族解放戦線の影響より新たに生まれた種。彼らは森の奥深くでひっそりと暮らしている。

夜者は呼び名にあるように夜にしか生きられない。

太陽に弱く、太陽の光を浴びすぎてしまうと弱り死に至るといふ。

そんな物語は北の大陸・ベルマーレから始まった。

+

王都エルステイナでは人族解放二十周年祭の前夜祭で街は賑わっていた。

商店街も居住区も飾り付けで大賑わいだ。

「祭りか？騒がしい・・・」

黒いフードマントを身に纏った男が王都に足を踏み入れた。

「さっさと用事を済ませて帰りたいんだけど・・・人が多いな、路地から廻って行くか」

彼の名はクロム。

彼は路地を歩いていく。目指すはエルステイナ城。

「離して下さい」

突然、叫びにも似た声が飛び込む。

路地奥の先に女性がガラの悪い男二人組に絡まれていた。

「ちよと奉仕して欲しんだよ。良いだろ嬢ちゃん」

「離して下さい。人呼びますよ」

「最高の快感を味あわせてやるから。きつと気に」

ドカツとガラの悪い男の一人が壁に叩きつけられ張り付いていた。

それをしたのはクロム本人。

「何さらすんじゃガキ」

「大の大人が女の子を寄つてたかって、恥ずかしくないのかよ」

「うっせんだよ。ガキはすっこんで」

クロムは悪男の一人の話を最後まで訊かずに跳躍すると顔面めがけて蹴り壁に叩きつけた。

「今時あんな誘い方する奴がいるなんてな」

「あの、ありがとうございます。助かりました」

少女は深々と頭を下げた。

「ああ、別にいいよ。じゃ、僕は用事があるので、これで」

「どこかに行かれるのですか？お急ぎのようですね」

「・・・城に」

「お城、お城と申しますと、エルステイナ城ですか？」

「ああ、父さんのお使いでね」

「それでしたら、御一緒させて下さい。わたくしもエルステイナ城に向かっています。あっ、わたくしはシーラです。あなたのお

名前をお訊かせ下さい」

「・・・・・・・・クロム・・・・・・・・クロムだ」

十

「どうしてダメなんです」

「正式な手続きをとっていただかないと謁見は許可できません」

「緊急なんだ！」

城の入り口で警備兵と耳の尖った神族の女性と耳の長い魔族の男性が言い合っていた。

「どうかなさいましたの？」

「あつ、皇女様。彼らが女王陛下に謁見を求めておりまして」

「君はこの国のお姫様だったのか？」

「ごめんなさい。あまり口外するなどお母様から言われていますので・・・・・・・・この方々を入れて差し上げなさい」

「ですが」

「わたくしが許可します」

「はっ、仰せのままに」

十

クロム、シーラ、神族の女、魔族の男。4人は謁見の間に通された。

「よくいらっしやいました。ではさっそく、そちらのフードマントの方から用件を聞きましよう」

クロムは一步前に出た。

「女王陛下。先に言うておきます。これからアナタに敬語は使いま

せん」

警備兵やシーラたちはあまりにも大胆なことに言葉を失った。

「構いません。よろしいでしょう」

「ぼくがここにきたのは父さんのお使い、ただそれだけだ」

クロムは一步づつ女王に歩み女王を護る警備兵二人のところまで近づいた。

「これ以上は許可できない」

「下がりましたまえ」

「アンタらの影借りるよ」

瞬間、クロムの言葉と共に警備兵二人の影に一本づつ腕を突っ込んだ。

警備兵だけでなく周り全ての人々が驚いていた。

影から腕を抜くと両手には剣が握られていた。

金と銀の剣。

それを、床に突き立てた。

「これをアンタに返しに来た」と、クロムは淡々と答えた。

「その剣は！あなたこれをどこで……」

「父さんから預かった。返しに行ってくれってな」

「アナタの名をお聞きしても」

「クロム・ヴァルシオネ・ケインツベル。アンタの察しの通りぼくは夜者だ」と、クロムの黒い瞳が女王を睨み付けた。

周りがざわつき始める。そう夜者という言葉に、夜者とは夜にしか生きられない種。昼に出れないことはないが太陽が照り返している時にこの場にいること驚いているのだ。

「では、父の名は」

「父さんの名はユウキ・デイガイト・フライア・ケインツベル。……アンタらが、裏切ったこの世界唯一の背徳種」

「……ユウキ……」

「じゃ、ぼくはこれで失礼する。目的も果たしたし、アンタのそばに居したくないから」と、女王に背を向けると謁見の間から出てい

った。

「…………お母様…………」

シーラは心配そうに女王を見つめる。

女王は椅子から立ち上がると床に突き立てられた金と銀の剣を握った。

「懐かしい…………わたし…………わたしは…………」

女王の瞳からとめどなく涙があふれ出ていた。

「…………裏切った…………裏切りたくなかった…………でも、だけど…………ただ背徳種だからという…………理由で…………」

「

シーラや他のみんなは、なんと声をかけていいかわからず、ただその姿を見ていることしか出来ない。

「…………裏切ってしまった…………わたしは、わたしたちは…………英雄なんかじゃない…………」

その言葉に周りの人々はどよめいた。

「本当の、英雄は…………英雄は…………」

今から約百五十年前、神族と人族間で戦争があった。

神族の法力に対して人族は特別な力を持っていたわけではない。物と物を合成させる合成練金で対抗した。

しかしその結果は目に見えていた。

勝てる相手ではないことは解っていた。

神族は法力で人族を圧倒、勝利した

それ以降、人族は奴隷として扱われるようになった。

そして二十年前、人族解放戦と呼ばれる争いが起こり人族を解放に導いた三人の英雄。

神族のゼウデイス・エスタシオ

魔族のミール・ゴードイス

そして、人族のアルシエール・ベルマーレ・エルステイナ・アルナベルツ

しかし、それは結果的にそう呼ばれることになっただけである。

権力を持つものが真実を葬り偽りの真実を示した。

その結果が三族の英雄譚。

「本当に人族を解放に導いたのは彼、ユウキよ。……………彼が真に本当の英雄なのよ……………」

十

日は沈みかけていた。

夕日の眩しさを感じながら噴水中央広場に設けられたベンチにクロムは腰をかけていた。

「祭りがそんなに楽しいか？理解できん」

「ようやく見つけました。こんなところにいらしたのですね」と、聞き覚えのある声がクロムの耳に届いた。

「皇女様か？ぼくに何のようだ？」

「クロム様」

「アンタにそう呼ばれる筋合いはないな」

「……………わたくしの事、お嫌いですか？」

「……………正直に言おう。嫌いだな！」

「っ！……………やはり、お母様の所為なのですか？」

「偽りの三英雄に関わる者。例外なく全てが嫌いだよ！」

「……………偽り……………確かに、そうかもしれません。ですが……………」

「……………」

「なんだ！」と、シーラを睨み付ける。

「……………お母様に、お訊きしました。二十年前の人族解放戦線の事を……確かにお母様や他の方々は貴方のお父様を裏切ってしまった。ですが、それは……………」

「父さんが背徳種だからか？」

「……………そう、です」

そのシーラ言葉にクロムは感情を爆発させた。

「人族の次は背徳種差別か！父さんが何をした！人族を解放に導いた。ただそれだけだろ！神族と魔族のハーフ。そのなになが悪い！父さんの両親が愛し合っていたからこそ父さんが産まれた！違うか！」

シーラはクロムに反論しようと言葉を探すが見つからない。正論を並べるクロムに言い訳なんて通じない。

「アンタもアイツラと同じって事だ！人の行為を無にして、有り難みすら分らない。しまいには真実を葬り、真実を知ってもなお、その真実から目を背け事実を受け入れない！」

シーラはクロムの視線から反らした。

「救いようがないな……………ぼくが夜者になったのは父さんの所為だ。だけどぼくは、父さんを恨んだりはしない。確かに最初は恨んでいた。けれど父さんは自分で招いた結果を悔やんで償おうとしている。だが偽りの三英雄共はどうだ。何もしようとしてない、ただ平和になった世界を謳歌しているだけじゃないか！」

「……………」

シーラはかける言葉が見つからず無言のまま唇を噛みしめた。

クロムの言っていることは正しかった。

お母様や他の三英雄は何もしてこなかった。

ただ生きてきただけ、シーラは一番近くでそれを見てきた。だから、嫌というほどよく分かる。

「もう会うことはないだろ。じゃあな、皇女様」

クロムは正門に向け歩きだした。

「！今から王都の外に出るおつもりですか？」

「さつきまで泊まっていこうかと思ってたけどやめた」

「・・・・・・・・わたくしが居るからですか？そうやって人を避けて生きていくおつもりですか？」

「避ける？違うな避けているのはアンタラだろ。夜者という種を避けている。違うか？」

日が沈みきっていた。

クロムはフードを脱ぎ顔を露わにした。

「・・・・・・・・世界から弾き出された種族。・・・・始めて、見ました」

「これ以上アンタと話しても無駄だ」と、今度こそ歩みを止めることなく正門を潜っていった。

漆黒の夜。

三十歳後半の男は二つの月が輝く空を見上げる。

「……また、始まるのか。運命に翻弄される物語が……」

男は手錠付きの両手を空に掲げ、一拍して何か決意を固めたかのよう  
にその手を握り締めた。

「……だが、させはしない。物語は幸福で終わってこそ真  
の終焉を迎えるんだ」

十

「夜通し歩きは疲れるなあ」

クロムはフードを被った姿でひとり呟く。

木々の隙間から朝日を感じながら森の奥にある小さな村に着いた。

そこはクロムが育った村だ。

察しはつくだろう、人口の九割は夜者だ。

クロムは見慣れた木製の古びた家の扉を開けた。家の中は全ての扉  
が閉めきられている。

クロムの家だけではない、他の村人も全ての窓を閉め切っていた。

「ただいま」

「お帰りなさい」と、姉のリルフィーナが優しく笑みを浮かべ出迎  
える。その瞳は黒かった。そうリルフィーナも夜者だ。

部屋に戻ったクロムはフードマントを脱ぐとベッドに寝転んだ。

昨日の疲れが一気に押し寄せてきたのだろう。

直ぐさま眠気が襲い深い眠りについた。

十

東の大陸リーズリオ。

聖族の王国、ウォルデルト。

その王城の中庭に緑色の瞳をした幼い少女が自分より大きい杖のような物を手に目の前にいる五十代の男　　ワイズウォーグ・リーズリオ・ウォルデルトを見据えていた。

「リーズラよ。解っているな」

「はい」

リーズラは全てを受け入れ決心したような眼差しをしていた。

「お前が失敗すれば我々、聖族の未来は開けない」

「解っています」

「では、リーズラ・リーズリオ・ウォルデルトよ。今この時よりアンヴィバレンツの使用と四聖獣の召喚を許可する」

「ありがとうございます」と、幼き少女は一礼した。

十

太陽は沈んでいた。

普通の人であれば、一日の疲れを癒すために眠る時間帯。しかし、夜者の村は違った。

昼間は閉めきられていた窓や扉が開かれ賑わう声が村中から聞こえてくる。

クロムの家もその中のひとつだった。

「父さん、話があるんだ」

クロムはリビングでゆっくりしている義父であるユウキに話をきりだした。

今まで触れることはなかった。

暗黙のルールのように訊くことのなかった過去の話。

クロムとリルフィーナはユウキと向かい合うようにリビングテーブルを挟んで座っていた。

「人族解放戦線でのことなんだ。ぼくが知っているのは父さんが人族を解放に導いたって事と、仲間だった偽りの三英雄に裏切られたって事。それから、夜者を生み出す原因を作ってしまったって事だけ」

リルフィーナは、感謝を口にした。今まで伝えることの出来なかった素直な気持ち。

「父さま、今まで私たちを引き取り養ってくれたことに感謝します。何が良くて、何が悪いのか。だから」

一時の沈黙が襲う。ユウキは考えた末に沈黙を破るように口を開いた。

「……そうだな、もう話してもいいかもしれないな。辛い真実を語る事になるが、いいか？」

「覚悟は、ある！」

クロムとリルフィーナは頷いた。

「それじゃ、後に三英雄と呼ばれる事になる、かつて仲間だった名前を教えよう。」

神族のゼウデイス・エスタシオ。

魔族のミール・ゴードイス。

そして、人族のアルシエル・ベルマーレ・エルステイナ・アルナベルツ。

クロムはアルシエルと昨日会っているだろう」

「……女王ですよね！」

ユウキは頷くとコップを手にし口に含むとテーブルに戻した。

「……………じゃ、語ろう。真の物語を」

十

エルステイナ城。

女王の間。

「……………ユウキツ……………」

女王 アルシエール・ベルマーレ・エルステイナ・アルナベルツ。

「今さら返されても、私にどうしろというのかしらね」

アルシエールは壁に飾られた金と銀の剣を見つめた。それを見つめていると二十年前の光景が脳裏をかすめ笑みがこぼれた。

若い時のユウキが『金の剣・オルディウス』と『銀の剣・サウティス』を操る姿。

「ごほっ、ごほっ」

アルシエールは手で口を押さえ咳をした。

口から離れた手を見ると掌一杯に血が付いていた。

「もう、永くないみたい……………」と、窓の外を見上げた。

「ユウキ、貴方の言った通り空はあの頃と変わらないね。二十年前と同じ、夜になれば黒くなり朝になれば青く色を変え私たちに太陽の恵みと睡眠を与えてくれている」

十

「世界の為、人族の為、愛する人との約束の為、だからオレは……………両親をこの手でやった」

ユウキは手錠されている腕を見つめた。

いや、されているのではなく、している。

ユウキの手錠は自分に対する戒めなのだとクロムとリルフィーナは今ようやく理解した。

「……それが真実……」と、クロムは呟いた。

「……うっ、ひぐっ……ひぐっ……」

クロムの隣ではリルフィーナが泣きじゃくっていた。

「リルねえ。そんなに泣くことじゃ」

「……だってえ……父さまが……父さまがあ……悪者みたいで……」

「そんな事は無い」と、ユウキはリルフィーナの頭を撫でた。

「えっ？」

「だからこそ君たちに出会えた。不幸なことばかりじゃない」

「あつ……父さまっ……」

リルフィーナは頬を赤らめ幸せそうに微笑んだ。

「クロム。だからお前が三英雄を恨む必要はないんだ」

「だけど……それじゃ父さんは世界中から悪者扱いじゃないか！」

「いいんだよそれで。英雄呼ばわりされて祭り上げられるよりずっとましだ。だから、な？」

「……父さんが赦してるって、そう言うなら……」

「まあ、すぐには言わん。少しずつでいいんだ。少しずつで」

ユウキは優しく微笑んだ。

十

昼時。

コンコンと訪問者によって扉が叩かれた。

「はい」と、リルフィーナが声を上げ扉へ駆け寄ろうとするところにクロムが「ぼくが出るから」とノブに手をかけた。扉を開いた

その先にいる者たちを見てクロムは言葉を失った。

「っ！」

そこに、シーラと彼女と共に謁見した神族の女と魔族の男がいた。クロムは一度目を閉じると、一拍おいて意を決したように言葉を紡いだ。

「……………ウチに何のようだ皇女様」

「……………あの、ユウキ様は、ご在宅でしょうか？」

十

「で、人族のお姫様が背徳種のオレに何のご用なんです？」

ユウキはテーブルを挟んでシーラと他二人は座っている。

「あの、再確認させて下さい。貴方はユウキ・ヴォルザクディオ・デイガイト・シュヴァンテ・フライア・ケインツベルですか？」

「そうだが」

「今日はユウキ様にお願いがあつて伺いました。真の英雄である貴方にしかお願いできないのです」

「……………英雄、かつ、違うな。英雄て言うのは過去の功績や結果により人から与えられる称号。オレは英雄なんかじゃない。オレは咎人だ」

「ですが、人族を解放に導いたお方。その功績は事実なはずです」

「ふっ、前と言つてることが正反対だな」と、クロムが茶々を入れた。てきた。

「どんな事でも言つて下さつても結構です。ですが、再び世界が危機に招かれている。それは、真実です」

ユウキは無言で眉をひそめた。

「神族の王アルマイルと魔族の王イスカディア。お二人が世界を統括しようとしているのです」

「統括？別に世界が一つになることの何に問題があるんだ」

「やり方に問題があるのです。力による制圧など許すわけにはいきません」

「制圧かつ。で、話を変えるが姫様そちらの方々の紹介をしてほしいのだが」

「あつ、すみません。紹介がまだでしたね。こちらの魔族の男性はゼルファード・ヴォルザクディオ・デイガイト。こちらの神族の女性にはレニーシャ・シユヴァンテ・フライアです」

「！　　デイガイトに・・・フライア・・・王家の血を継ぐ者」

魔族のゼルファードがユウキを見据える。

「アンタがユウキか」

神族のレニーシャが呟く。

「確かに面影がありますわね」

「三種族の王位継承者が揃って頼みに来てるってことは相当ヤバイ状況なのは分かった。しかし、オレも歳だ」

ユウキは席を立ち上がる。と「そんなんっ！」と、続いてシーラも勢いよく立ち上がった。

「だから、クロムを連れていくといい」

ユウキはクロムの肩を軽く叩いた。

しかし、クロム本人も驚きを隠せなかった。

「父さま、なに冗談を言ってるんですか？」

リルフィーナが割って入ってきた。

「冗談だと思うか？」

ユウキの目を見てリルフィーナは何も言えなくなった。本気の目をしていたからだ。

「オレの全てを与えている」

ユウキはクロムに向き直る。

「やっってくれるか？」

そんなユウキの言葉にクロムは小さく笑った。

「父さんの頼みならばくが断る理由はないよ」

十

玄関前。

リルフィーナは、クロムに忘れ物はないか再確認する。

「薬草は持った？他に忘れ物はない？」

「リルねえ。それも十二回目だよ。ちゃんと持ったし忘れ物ないから」と、クロムはフードコートを広げて見せた。

「クロム。これを持っていくといい」

ユウキは二本の剣を渡した。その剣はそれぞれ異なる形をしていた。

「これは？・・・」

「フリーディアとジャステリエだ。使え」

「・・・ありがとう。父さん」

クロムは両手に剣を握ると、自分の影に吸い込ませ収めた。

「頑張つて来い」

ユウキはエールを送った。

クロムは力強く頷くとフードを被り扉を開け太陽の照らす外へと出ていった。

十

東の大陸リーズリオ。

森の奥にある湖でリーラは水浴びをしていた。その光景は神秘的で踊っているようにも見えた。

ガサツという茂みの音に、リーラは素早く杖を立て掛けていた樹木

の所まで駆け寄り、杖を音のした茂みに向け構えた。

「……………」

沈黙が流れた。

どれくらい経ったか分からない。

暫くするとリーラは「気のせいね」と杖を再び樹木に立て掛け湖から上がった。彼女は樹木の根本にたたんで置いた服に腕をおした。「失敗は赦されない。あと五年、それまでに……」

くくという音が聞こえリーラは顔を赤く染めお腹を押さえた。

「お腹空きました。町まで下りて今後のこと考えましょう。まず腹ごしらえです」

リーラは杖を抱え町へ向け歩きだした。

十

クロムが村の外れに差し掛かるとシーラ、ゼルフアーダ、レニーシヤが待っていた。

「ごめん、待たせたかな？」

その問いにゼルフアーダは「いいや」と、呟いた。

「待たせたと言うより待ってたって感じよね」と、レニーシヤ。

「……あの、おひとつ伺っても宜しいですか？」

シーラがおどおどした感じでクロムに寄ってきた。

「ん、何？」

「……わたくしの事……まだ、赦してはくれませんか？」

そんな事かとクロムは頭をかいた。

「はあく、父さんが赦してるっていうのに……ぼくだけが赦さないなんて……理不尽だろ」と、吐き捨てると先行していった。

「っ！ありがとうございます。これから宜しくお願いいたしますね。クロム様」

十

南西に位置する墮天帝国。

その中心に真新しい建造物・墮天城があった。

城内の装飾は神族のとも魔族のとも取れず、中立的な造りをして  
いた。

そして、王室には神族の王、アルマイル・シュヴァンテ・フライア・  
アルナベルツと

魔族の王、イスカディア・ヴォルザクディオ・ディガイト・アルナ  
ベルツがいた。

「ゼルフアードとレニーシャが裏切ったようだ」と、イスカディア。

「別に焦る必要はない。誰も我らに勝てはしないのだからな」と、  
アルマイルはたんたと答える。

「・・・そうだなアルマ。我らには最後の切り札があったな」  
「そういうことだ、イスカ」

十

夕刻。

空は赤々と染まっていた。

南西に向けて海の上を走る一隻の船がある。

その甲板にクロム、シーラ、ゼルフアード、レニーシャの姿が伺え  
た。

「レニーシャ様、前方に見えるアレがそうなのですか？」

シーラはレニーシャに訊ねる。

「ええ、神族と魔族の新帝国・墮天帝国です」  
「しかし、やっぱり何度見てもいけ好かねーな。あの姿」  
ゼルファードは呟いた。  
「自分の故郷を否定するか普通」  
クロムは前方に見える墮天帝国を見つめた。

十

クロムの実家。  
リルフィーナはリビングテーブルの上で日記を書いていた。そこに  
ユウキが部屋から出てきた。  
「リル、ちよと出てくる」  
ユウキは一言伝えると家を出ていった。  
一人残されたリルフィーナは「父、さま？」と呟いた。

十

「多いな」と、ゼルファード。  
「多いつてか、多すぎだろ」と、クロム。  
墮天帝国に着いたクロムたちを待ち受けていたのは、地平線まで続  
くほどの神族と魔族の軍勢だった。  
数は有に万は下らない。  
「逃げたくなっちゃったの？」と、レニーシャは弓・キュリウスを  
敵陣に向け弦を引く。  
「そんな分けないですわよね？クロム様」と、シーラは剣・サウゲ  
ウスを構える。

「やっぱり、多いな」とゼルファードは斧・ライズを頭上で回す。

クロムは自身の影に両の手を突っ込み剣を引き抜いた。

「みんな準備はいいか？」

シーラ、ゼルファード、レニーシャは頷いた。

クロムはフリーディアとジャステリエを敵軍勢に向け構える。

「じゃ、行こうか！」

クロムの掛け声と共にシーラたちは軍勢の中に飛び込んでいく。

十

墮天城内の王室。

アルマイルとイスカディアは座っていた椅子から立ち上がった。

「ついに来たか？」と、イスカディア。

「そのようだな、では、我らも出迎えの準備をしようじゃないか！」

「そうだな」

アルマイルとイスカディアは部屋を出ていった。

十

墮天軍勢の中、先を行くゼルファードの後方からレニーシャはキュリウスで無数の矢を放ち支援する。

クロムとシーラは互いに背中合わせになり眼前の敵をなぎ払う。

「クッ、ちよつとキツイかつ。レニーシャ、クロムは今どの辺りにいる」と、ゼルファード。

「お城に近い位置みたい」

「強いわけじゃないが、多い！」

クロムはひたすら迫り来る敵を倒していくがキリがない。

シーラも眼前の敵を倒していく。

瞬間、レニーシャと一瞬眼が合いアイコンタクトで何をするかシーラは理解した。

突然、シーラはクロムの背中を押して行く。

その行動にクロムは戸惑い何が起きたのか、一瞬分からなかった。

シーラが押すのを止めたのはその中に入ってからだ。

「クロム様は先に行ってください！わたくしたちもすぐに追いかけますから」

クロムが理解したときはすでに遅かった。ガコンと音を立てそれは閉まる。

そう、そこは墮天城内。眼前の扉は城門。

シーラたちはクロムにすべてを託し中に押し入れたのだと理解できた。

「ぼくに背負えというのか。世界を、全てを・・・背負えと・・・くっ」

+

墮天城、城門前。

敵軍勢を目の前にシーラ、ゼルフアーダ、レニーシャはひたすらなぎ払っていく。

「全く減ってる気がしないな」と、ゼルフアーダがぼやく。

「それだけ墮天軍が強大だって事よね」と、シーラが返した。

シーラは城門を背に眼前の敵軍勢を叩ききっていく。

『・・・クロム様・・・わたくしは、初めて会ったあの日。助けて  
いただいたときから・・・きつと、私は・・・クロム様に、好意を  
抱いていました・・・ですから、嫌いだと、言われたとき、目の前  
が真っ暗になって・・・。。。。それでも、今でも、わたくしは、ア  
ナタを・・・』

クロムはすい寄せられるように走りその度に足音が城内に響きわたる。

しばらくしてクロムは扉の前で足を止めた。

その扉に手をかけ意を決して開いた。

そこは、大広間だった。

瞬間、クロムの顔が険しくなる。

それは、部屋の中央にはアルマイルとイスカディアがいた。

「アルマイル！、イスカディア！」と、クロムは二人の名を叫んだ。アルマイルは一步前に出た。

「キミが誰だか知らないが、我々は王族だ。様を付けたまえ、無礼ではないか」

「アンタらに様を付ける通りも敬語を使うつもりもない！」

「お前は何をしに来た」と、イスカディアは淡々と言葉を紡ぐ。

「アンタらがこれからしようとすることを止めに来た。神族と魔族による世界征服だ」

アルマイルは、しれつと答える。

「征服？言葉が悪いな。統括だよ。我々が行おうとしていることは」

「そんなのただの言葉遊びだ。力による支配が統括な訳がない！そんなことあつてはいけないんだ！」

アルマイルとイスカディアにクロムは一步も引かない。

「権力者なら考える！自分の私利私欲の為じゃなく、世界に生きる多民族やアンタらの下にいる部下たちのことを！」

「アマいな。そんな考えじゃ何も変えられない。人も、世界も、何一つ変えられないぞ！」

アルマイルは言いきった。

「それでも、それでもぼくは！」

クロムは強く拳を握り締める。

「護りたい人たちがっ、世界がっ、あるんだああああ！」

刹那、クロムは雄叫びと共に自身の影から自由の剣・フリーディアと正義の剣・ジャステリエを抜き、眼前の敵・アルマイルとイスカディアに向かつて走り出した。

それを見たイスカディアが吼える。

「向かってこい！向かってくるがいい！お前の信じるモノのために、それを完膚無きまでに叩き潰してやる！」

十

日は沈みきつていて全てのモノが静寂に包まれている。

人族の繁栄都市・王都エルステイナ。

王都中央には街のシンボルでもあるエルステイナ城が堂々とそびえ立っている。

女王の間。

ベッドで眠るアルシエール女王を見下ろす人影があった。体型からして男だ

人影は顔を貸すように仮面を被り、両手には手錠をしていた。

仮面の男は「アーシエ」と、呟いた。

するとアルシエールは何かに導かれるように目を覚ました。

「……んっ……」

アルシエールは部屋にいる仮面の男を見ても驚くことも警備兵を呼ぼうともしなかった。

アルシエールは察したのだ仮面の男は自分を知っている。

そして、自分が知っているが誰かなのだと。

「……二十一年、ぶりだね……」と、アルシエールは臍をゆっくり起こした。

「ああ、久しぶり、よく、分かったな」と、仮面を外した。アルシエールの察した通り仮面の男は嘗ての仲間であり、大切だった人であり、裏切ってしまった人。

「・・・懐かしい呼び名が訊こえたので・・・アナタが呼んだのでしょ、ユウキ」

「アーシエか？」

「アナタが付けてくれた愛称だから」

「そう、だったよな」と、ユウキはアルシエールとの出逢いを思い返した。

「キミと出会ってから色々あったから、力を貸して欲しいから始まったんだよな、そして、いつの間にか人族を解放するために戦った」

その後は、言えなかった。

仲間に裏切られたとはユウキは口にしたくなかった。

一時の静寂が二人を包んだ。

その静寂をユウキ自ら破いた。

「アーシエ、何故、彼女をオレのところに寄越したんだ？」

「シーラですか？」

アルシエールの言葉にユウキは頷いた。

「・・・彼が・・・クロムが、世界を変えてくれるかもしれないと思ったから。どことなく出会った頃のアナタに似ているところがあった。だから、頼ってしまった。・・・あの、頃のように・・・」

「全て計算してのこと、かつ。オレは、キミの手の上で踊らされていたって事かつ」

「ちが、それは違います。そうなればいいなと願っていただけです。・・・ただ、それだけで・・・」

「別に怒ってるわけじゃないよ。オレは話をしに来ただけなんだ」

「ありがとう。それと、ごめんなさい」

「いきなり、なんの礼と詫びなんだよ」

アルシエールは一度口紡いだが意を決した。

「……今までのこと、全てに対して、最期にあなたに会えて本当によかった」

「……最期……どう言うことだ！」

「そのままの意味ですよ。わたしはもう、そう長くはない……ゴホッ、ゴホッ」

アルシエールは咳をし口元から一筋の真っ赤な血を流した。

「アーシエツ！」

「これはわたしの犯した罪への罰」

「罪ってなんだ！オマエは罰を承けることなんて何もしてないだろ！」

「アナタに話さなくちゃいけないことがあるの」

「もういい、喋るな！」

「シーラのこと隠してたことあるの……」と、アルシエールはユウキの手を掴んだ。

十

墮天城内、大広間。

二つの剣がせめぎ合う。

クロムとイスカディアだ。

アルマイルは王壇の上にある装飾された椅子に座り高みの見物と言うように二人の戦いをみていた。

「我々に勝てると思うてか！」

イスカディアは剣を弾き互いに間合いを取った。

「お前の名はなんという」

「クロムだ。クロム・ヴァルシオネ・ケインツベル

「我はイスカディア・ヴォルザクディオ・デイガイト・アルナベルツ。我が名をお前の魂に刻み付けてやる！」

刹那、イスカディアはクロムの視界から消えと同時にクロムは腹部に衝撃を覚え痛みを表現する間もなく壁に叩きつけられた。

「所詮、お前は人族。魔族である我に勝てるはずはない」

「ち、違う。僕は、夜者だ！」

夜者という言葉がスイツチだった。

影がクロムの躰を侵食していった。

刹那

「もう、止められない」と、言うクロムの呟きと同時にイスカディアの腹部をクロムの腕が貫通していた。

イスカディアは大量の血を吹き出し倒れた。

いや、動かぬ物 屍となった。

ガタツとアルマイルは立ち上がりイスカディアに駆けより抱き起こした。

「貴様！何をしたアアアアア！」

「夜者を眼下してきたアンタには解るはずはない！」と、クロムはアルマイルを見下す。

「なんだと！」

「夜者の事を何も知らない、夜者とは何か、どんな力を持っているのか」

アルマイルはキリツと歯をならす。

「影、闇、陰、夜。それら全て連なるものそれが夜者。昼と夜。光と影。表と裏。世界の半分は夜者の存在を認めている。アンタが神で光なら夜を連なる者としてよく いや、オレがアンタの計画を叩き潰す！」

エルステイナ城。

女王の間。

「もついい、喋るな！」

ユウキは話を止めないアルシエールを止めようとするが「シーラのこと隠してたことあるの・・・」と、アルシエールはユウキの手を掴んだ。

それは最後まで訊いて欲しいというアルシエールの意思表示だとユウキは理解し頷くしか出来なかった。

「二十年前、アナタとの、たった一度の交わり、その時の・・・

」

「えっ？」

ユウキは己の耳を疑った。

「・・・私は、貴方にしか躰を許してはいません。あの時の一度だけ・・・」

「それじゃ、シーラはオレとキミの・・・娘って、ことなのかっ！」

アルシエールは頷く代わりに微笑んだ。

「あの子、が・・・」と、ユウキはシーラの事を思い出そうと眼を閉じた。

「これは運命なのか？」

「これを・・・」と、アルシエールは枕下に隠していた赤表紙の書物をユウキに渡した。

ユウキは書物を開いてみると真つ白だった。

「・・・これは？」

「・・・シユヴァルツァーザルクです・・・コホツ・・・」

「シユヴァ・・・ルツァー、ザルク？・・・創造詩か！」

「ええ」

「世界を創造することも破滅させるとも伝えられている書物・・・

伝説の代物と思っていたんだが、そんな物をなぜキミが」

「それは代々、エルステイナ家に伝えられて・・・いたものです・・・」

「そんな大事な物をどうして、オレなんか」

アルシエールは微笑んで見せた。

「アナタなら、正しく使ってくれると思ったから」

「アーシエツ」

「本当にありがとう、ごめんなさい。わたしには言葉でしか、アナタに伝えることが出来なくて」

アルシエールは涙を流しながら言葉にできない感謝を紡いだ。

「そんなことない！キミがいたから今のオレがいる！キミを愛したからこそ娘にだって会えたんだ！」

「・・・ユウキ・・・ありがとう・・・それ以上の言葉、見つからないよっ・・・ゴホッ」

突如、アルシエールが血を吐き出した。

「アーシエツ！」

ユウキはアルシエールを抱き締めた。

血で服が汚れようがそんなのはどうでもよかった。

「・・・ごめん、服・・・汚しちゃ・・・」

アルシエールの咳が止まらず、そのたびに血を吐き出した。ユウキは力一杯アルシエールを抱き締めた。

彼自身感じ取れたのだ。

もう最期なんだと、

アルシエールの命の灯火が消えようとしているのだと、

だから、ユウキは、抱き締めた。

初めて愛した大切な人を、

最期の一秒を共に過ごすあの時の約束を果たすために、

想いを込めて抱き締めた。

その温もりを忘れないために、

どれほど抱き締めていただろうか。時間の感覚すら分からなくなっ  
た。

「アーシエツ？」

ユウキは抱き締めたまま、彼女の名を呼ぶが返事はなかった。

ゆっくりとアルシエールの躰を離すとそこには幸せそうに微笑む彼  
女の顔があった。

「アーシエツ」

分かっていった。

言わずとも分かる。

アルシエールの躰が少しずつ冷たくなっていく。

それがなにを物語っているのかユウキは理解していた。

アルシエールはもう、居ないのだと、

この世界中どこを探しても見つけられない場所に逝ったのだと、  
泣いていた。

ユウキは泣いていた。

声をかみ殺し涙だけ流し泣いていた。

大切な人の為に

たった一人の女性の為に

また、明日を生きる為に

涙が枯れるほど泣いていた。

瞬間、太陽の沈んだ夜の世界を目映い光で照らされた。

十

アルマイルは屍となったイスカディアの肉を食らう。

「食っているのか！アント！」

それは神族王家だけに許された能力。他の肉を食らうことでその者の力を己の中に取り込む事。

「神と魔の融合族。墮天族とも呼ぶがいい」

「・・・墮天族・・・ふざけんのも対外にしろ！」

「それは我々の台詞だ！世界から弾き出された存在が！」

クロムとアルマイルは互いに睨み合い利き腕を突き出すと光を輝かせた。

「アルマ　　！」と、クロム黒い閃光。

「クロ　　ム！」と、アルマイルは青い輝き。

声を張り上げ、技を互いに放った。

閃光。

二つの閃光が重なり合い激しく輝いた。その光は一段と激しさを増し、そして爆音と共に太陽の沈んだ闇の世界を光明の輝きで包んだ。

十

輝きに満ちた夜空を自分の身長より大きな杖を持った少女が見上げていた。

「・・・綺麗な、輝き・・・この光が、わたしの進む未来への残照ではなく、光明であるとよいのですが」

少女は決意の眼差しで夜空を見上げていた。

十

部屋に培養槽とそれを繋ぐ機械がある。

培養槽の中には腰まで延びた長い髪の女と彼女を繋ぐ無数のケーブル

ル。

窓の外は暗く夜であることは明白だ。しかし突然、目映い光が世界  
全てを包み込む。

その光に誘われるように女は目を覚めた。

そして、何かの名を口にした。

「……………アムリア……………」

墮天帝国がほぼ世界を統括して早二年。

墮天暦二年。

王都エルステイナの正門前に腰まで伸びた女が立っていた。

「今こそ約束を果たしてもらいます」と、意味深な笑みを浮かべた。

「クロム……」

十

夕刻。

月明かりに照らされ大きな鷹によく似た獣が大空を飛んでいた。

アルナベルツ大陸を守護する四聖獣のひとつウィルネ。

その背には二つの人影がある。

幼い少女と仮面と手錠をした男だ。

「休まなくて大丈夫か？」と、仮面の男が心配そうに問う。

キュウウウ。

「心配いらないうってウィルネが言っています」

少女が聖獣の通訳をする。

「しかし、休み無しで飛び続けてるんだ。疲れが溜まっていてもおかしくない」

キュウ。

「見くびるなって言ってます」

「わかった、あんま無理するなよ。後、リーラもな」

「ありがとうございます。ユウキさん、時間がないですから急ぎましよう」

「違う、今はエルガと呼んでくれ」

「……はぁ……エル、ガ、ですか。何故です？」

「格好いいだろこの仮面。仮面を付けてるときは謎の男エルガとして行く」

「あの……そんなことして、何か意味あるのですか？」

「いや、意味はないが、仮面は男の夢だ！ロマンなんだ！」

「そんな力説されてもわたしは女だからよく解りません」

十

小高い丘の上に赤い瞳をした青年が立っていた。

そこからの風景は月明かりに照らされ幻想的で美しい。

「兄さま、こちらに行らしたのですか？捜しましたよ」

「ああ、シーラか！」

「綺麗ですよ。わたし、ここからの景色が一番好きです」

「俺もかな」

「つて、そうではありません。こんな時期に外に出ては危ないんです。世の中物騒なんですから」

「死んだら死んだときだ。オレは太陽の下に出れない駄だからな……  
……忘れられた皇子、クロム・ベルマーレ・エルステイナ・アルナベルツ」

「そつ、そんなことはありません！民衆が忘れたとしてもわたしは絶対に忘れたいしません！」

「……でもそれじゃ結局 民衆に忘れられてるじゃないか」

「あつ！」

「でも、ありがとなシーラ」と、兄と呼ばれる男　クロムは笑みを浮かべた。

その笑顔にシーラはドキッと胸を高鳴らせた。

「じゃ、戻ろう」

クロムは躰を反転させ丘を下りていく。

「……この胸のドキドキ……好きになっちゃいけないのに……」

「シーラどうした？」

「あつ、うつん何でもないです」

「ほら」と、クロムはシーラに向け手を差し出した。

「兄妹だつてことを、こんなに恨んだことないよ」

シーラは呟き駆け出すとクロムの手を握った。

十

「進み具合はどうです？」

「ああ、もう少しで完成だ」

クロムは自室で大きなキャンバスに筆を走らせていた。

その隣にいるシーラは完成を楽しみにしていた。

「ホントに楽しみです」

安らぎの一時が流れていく。

シーラはこんな時間が永遠に続けばいいと思った。

瞬間

扉が蹴破られ複数のエルステイナ警備兵たちがクロムとシーラに銃口を向けた。

「申し訳ありませんがあなた方を拘束させていただきます」

エルステイナ警備兵の一人が申し訳ないと言うように口にする

「あなたたちどういいうおつもりですか？」

「エルステイナの時代は終わったってことだ」と、別の警備兵。

「この世の中、金なんだよ。金さえ払って貰えれば人族だろうと墮天族だろうと関係ない。アンタらを墮天族に売る」

「裏切るのですか！」

「違うな。もう、裏切ってたんだよ！」

クロムはシーラの前に出た。

「………わかった従おう」

「話が早くて助かるよ皇子様」

警備兵の一人が嫌味たらしく言い放った。

クロムとシーラは警備兵の指示するままに歩いていく。

部屋を出て十分以上歩いていた。

突然、クロムはシーラの抱きかかえ跳躍すると警備兵の頭上を飛び越えた。

「兄さま？何を」

十

エルステイナ城上空。

四聖獣ウィルネの背に乗るリーラが言葉を紡いだ。

「時が来たようです」

「ああ！あの女とクロムが接触する前に！」と、ユウキは頷いた。

「それじゃ行ってくるよりーラ。後は手筈通り頼む」

ユウキの言葉にリーラは頷く。それを確認するとユウキは抜いていた仮面を被りなおした。

そして、ウィルネの背から飛び降りエルステイナ城に向かった。

クロムは元エルステイナ警備兵を撒き城内の部屋で息を潜めていた。「兄さま！どうしてっ？」

「大切な人を守るのに理由があるのか？守りたいから守る！それだけだ！」

突然、扉が吹き飛ばされた。長い耳が特徴の者達が魔導機をを構え入ってきた。

「魔族！どうしてここに？」と、シーラは驚きを隠せなかった。

「墮天帝国！」

クロムは呟く。

魔導機に紫色の魔力が圧縮されていき、そして放たれた。

その魔力はクロムやシーラに向けられたものではなかった。

魔力は、クロムとシーラの背後の壁を破壊しその隙間から外界が覗く。

当てなかったのは魔族たちの警告の意思表示なのだろう。再び魔導機をクロム達に向け魔力を圧縮していく。

「悪いが、アンタラには従わない」

クロムは言い切った。

瞬間 魔導機がシーラに向けられ放たれた。クロムはとっさにシーラを吹き飛ばし身代わりとなる形になった。

不幸なことにクロムは魔力に吹き飛ばされ破壊された壁の外へと飛んでいた。

「兄さま！」と、シーラの嘆きの声が確かにクロムには届いた。しかし、今はもう駆け寄ることすら叶わない。

落ちていく、地面に向けたただ落ちていくだけだった。

「シーラッ、ごめんな。守れなくて、ごめん・・・」

クロムはそっと呟いた。

「兄さま！」と、シーラは壁穴から顔を出し落ちていったクロムの姿を探す。

「さあ、我々と共に来てもらおう」

魔族の一人がシーラに歩み寄る。

「何が、目的なのですか？」

「それは我らの王に訊くのだな」

「・・・堕天帝国！一体何を考えているのですか？」

「無駄話は終わりだ」と、シーラの腕を掴んだ時、グフツという唸る声が魔族の後ろから聞こえた。

刹那　魔族は振り向きざまに「何事だ！」という声と共に首が宙を舞った。

「貴方は？」

シーラの危機を救った人物は仮面を被り両手には手錠をしていた。体型から見て男だ。

「久し、ぶりだな」と、仮面の男は剣を鞘に収めた。

「何を言って・・・」

シーラの耳に信じられない言葉が飛び込んできた。

「初めてではないのですか？」

十

クロムは池から這い上がってきた。

城内にある池がクツシヨンの役割をはたし運良くクロムは軽傷ですんだのだ。

ずぶ濡れで這い上がると、目の前に腰まで髪を伸ばした女が立っていた。

「クロム、迎えに来た。私はお前の味方だ。お前の敵は墮天帝国」  
「えっ？」

クロムは女の予想外の言葉に我が耳を疑った。

「契約しただろ、私とお前は一心同体、パートナーだ」

「契約？パートナー？何の話だ！」

「わたしだけが知っている。本当のお前を」

女は一步づつクロムに近付いていく。

瞬間、女は背後から何者かに討たれた。

「・・・クロ、ム・・・」

クロムは倒れゆく女を抱き止めた。

「おい！」

「ご苦労だった、クロム・ベルマーレ・エルスティナ・アルナベルツ」と、訊きなれない声が耳朶に響く。

「・・・墮天帝国！？」

目の前には墮天帝国部隊が法力機や魔導機をクロムと女に向けていた。

「私たちは君を監視していたのだよ。ずっとな」と、部隊長らしき人物がメモ帳を開いた。

「七の時、起床。八の時、妹と朝食。九の時から十の時まで自室にて油絵を嗜み、十一の時から妹とテラスで雑談を交えたティータイム」

「ム」

「・・・今日の、オレ！・・・」

クロムは目を見開いた。

「餌の観察日記というところだ」

「餌？」

「餌と言ってもいい。その女、セリティスを誘い出すためのな」

「何を、言ってるんだ！」

「私は高貴だからね。これ以上、餌と話す気はない。処分の時間だ。やれ。これで目的は達せられる」

「処分？」

墮天帝国部隊の法力機、魔導機に力をため始める。

『オレが、終わる？何も解らずに、こんな簡単に……』

クロムの顔が仇を目の前にしたように険しくなっていく。

『フザケルナ！力を……力さえあれば！ここから抜け出せる力！世界に負けない力を！』

討たれたはずの女・セリティスがクロムの肩をつかんだ。死んだと思っていたが確かにいま動いている。

そして、クロムに口づけた。

『力が欲しいか？』と、セリティスの声が響く。

『……その声？さっきの女……』

クロムの頭に直接セリティスの声が響きわたっていた。

『力ならお前はもう持っている。』

思い出せ！本当のお前を

思い出せ！本当の世界を

今こそ封印を、解き放て！』

フラッシュバックのように映像がクロムの中に流れ込んできた。

『オレの日常への違和感……そうか、全ては偽りの記憶……』

・思い出した！……オレは、オレは……夜者だ！』

クロムに抱かれていたセリティスは立ち上がると横に避けクロムが前に出た。

『あの女 生きてる？バカな心臓を撃ち抜いたのに』と、墮天群がどよめいた。

『オレを処分する前に質問に答えてもらおう。無力が悪なら力は正義なのか？』

『正義も悪もない餌にはただ死という現実が残るだけだ』

『そうか、ならばお前たちにも現実を残そう。クロム・ユーフォニ

アム・ヴァルシオネ・アルナベルツが命じる。貴様ら全員、喰われよ！』

突然、墮天群は自らの影に沈んでいく。いや、呑み込まれているようにも見える。

『あの日からオレの中に納得がなかった。別の記憶を植え付けられた偽物の日常、支配された家畜の人生。だが、現実はおれを求め続けた。間違っていたのはおれじゃない！世界の方だ！』

クロムは前を見据えた。

「おれは夜者。世界を変える男だ！」

十

南西に位置する大陸に神族と魔族の新帝国・墮天帝国がある。帝国の中央には孤高と墮天城がそびえていた。

墮天城内・王の間。

テーブルの上に金色、紅、緑の駒が三つとそれに向かい合うように蒼の駒の後ろに黄色い駒が一つ置かれていた。

「申し訳ありませんアルマイル様。捕獲に失敗いたしました」

墮天兵が報告を入れる。

「そうか。まあ、良い。下がれ」

「はっ！失礼いたします」と、部屋を出ていった。

「セリテイスの捕獲の失敗によるクロムとの接触」と、紅の駒を金の駒の横に持ってきた。

「想定範囲内だな。世界よ踊れ、我が手の上で」

金の駒を手にとった。

「すべては伝説の種族の復活のため……計画は順調に進んでいるぞ、イスカ……」

十

エルステイナ城内庭園。

「兄さまっ！」

「シーラッ！」

クロムとシーラ、二人は再会を喜び抱きしめ合った。

「お前がここにいる。それが本当に嬉しいっ」

「わたしもです」

「しかし、どうして？」

「はい、あちらの方に助けていただきました」

樹木の影から仮面を被り手錠をした男・エルガが現れた。

「……貴方は！」と、エルガを視た瞬間、正体を覚った。

「二人つきりで、話せないか？話したい事がある」

十

クロムは自室にエルガを通した。

「話しとは何ですか？」と、クロムは目上の人に対する尊敬の意が表れている感じた。

エルガはキャンバスが目に入った。

「これ、お前が描いたのか」

「ん、まあ、まだ途中なんだけど」

「いい、絵だな。ちゃんとお前の想いがこもってる」

「ありがとう。で、話しとはなんですか？父さん」

「やはり、記憶が戻ったか！お前、セリティスと会ったな！」

「はい」

クロムは迷うことなく肯定した。

「そうか！……一つだけ忠告しておく。セリティスに、取り込まれるな」

「えっ？」

「お前は、お前の考えで動け！」

「オレの考えで？」

「オレから言える事はそれだけだ」

十

クロムは自室のバルコニーの塀に腰をかけ月を眺めていた。

『お前は、お前の考えで動け！セリティスに取り込まれるな』

エルガの言葉を思い出していた。

「……セリティス……彼女は何を考えているんだ？」

コンコンと部屋の扉が叩かれた。

「兄さま、もう、寝てしまいました？」と、扉越しにシーラが訪ねてきた。その問いに「いや、起きてる。入って来い」と、クロムは返した。

カチャリと扉が開かれシーラが入ってきた。

「兄さまっ」

シーラは不安げに呟くとクロムに駆け寄り抱きついた。

「どうした？」

クロムはシーラの頭を撫でながら問う。

「不安なんです。また、兄さまと離れ離れになるんじゃないかって、すごく不安、なんです」

「シーラッ」

「今だけはこうさせて下さい」と、一段と強くクロムに抱きついた。今だけじゃなくてもいい。ずっと、そうしてろ。オレが側に居て

やるから」

「兄さまっ、それはどういう」

瞬間、クロムはシーラに口付けをした。

「んっ」と、シーラの甘い吐息がクロムの耳を擦る。

シーラは嫌がるわけでもなく、はねのけるわけでもなく、瞳を閉じ  
クロムを感じていた。

クロムはキスをしたままゆっくりとシーラを押し倒した。

十

城内の庭園にある花絨毯にセリテイスは寝転び夜空の月を見ていた。

「・・・もうすぐで、会えるわ・・・」

セリテイスは右腕を天に掲げ月に翳した。

「・・・私とあなたのパートナー！。彼が新に目覚めるのも、  
そう遠くないわ」

上げていた腕を額に乗せた。

「・・・アマリア・・・」

十

「ごめん。もう、自分の気持ちを抑えられない」

クロムはシーラの唇から離しそう告げた。

「・・・私・・・私も兄さまの事を愛しています」

「いいの、か？」

「兄さま以外の人なんて考えられません」

「シーラッ、愛してる」

クロムとシーラ、二人は求め合うように唇を重ねた。

十

墮天城。

アルマイルは機械装置が並ぶ部屋にいた。機械装置から延びるケーブルは部屋の中央には大きめ培養槽に繋がり培養槽の中には背中に羽がある女性がいた。

その女性は瞳を閉じ眠っている。

「クロムよ。早く来い！コイツを取り戻しに我らに向かってこい！」  
培養槽の中がゴボツと苦しみを表すように泡立った。

「月の力を欲するなら取り戻しに来い！でなければ我々が貰うまでだ」

培養槽内の女は無意識内だろう。微かに口を動かした。

『……………セリティス……………』と、

十

エルステイナ城内。クロムの部屋のベッドでシーラが目を覚ました。

シーラは上半身を起こすとお腹の痛み押さえた。

「まだ痛むたる横になってる」

クロムはキャンバスに向かい筆を走らせている。

「兄さま。お早うございます」

「ああ、おはよう」

「変な、感じです。まだ兄さまが中に居るみたいなの……………」  
シーラは頬を染めた。

「そっか、昨晩は張り切りすぎたかな？」

クロムの言葉にシーラはシートで顔を隠した。

「に、兄さま、その発言変態です」

「シーラだから言えるんだよ」

「もうっ」と、恥ずかしさを隠すようにシーラはシートを被った。

「よし、出来た！」

クロムは走らせていた筆を置いた。

「えっ、完成したのですか？」

シーラは被っていたシートから顔を出した。

「ああ、こつち来い」

シーラはベッドから降りるとクロムの隣に移動した。

そして目の当たりにしたキャンバスに目を奪われた。

キャンバスに描かれていたのはクロムとシーラが寄り添い合い幸せそうに笑う肖像画だった。

「いい感じだろ？」

「はい、部屋に飾りましょう。このままなんてもったいないです」

「ああ、そうだな。お前の部屋に飾ろう。もともとシーラにと描き始めたんだしな」

「ありがとうございます、兄さま」

十

「・・・クロム・・・」

庭園の花畑にそよ風に長い髪を泳がせセリティスは立っていた。

「これから始まる悠久とも思える長い戦いが終わったその時こそ、世界の果てで響かせなさい貴方自身の偽りのない終焉の唱」を「

十

王都エルステイナ外壁の外。

仮面を被りロングマントを羽織った男が神族や魔族と剣を交えていた。

仮面の男の戦闘スタイルは双剣。

仮面の男は両剣で互いに神族と魔族の剣を防ぐと、払い上げ斬り裂いた。

「貴様は誰だ！」

「なぜ突然攻撃してくる！」

神族や魔族は突然の攻撃に困惑していた。

仮面の男は神族や魔族と間合いを取ると声を張り上げた。

「吾が名はエルガ。吾が理想とする世界を創る為に、吾が理想を阻もうとする存在は全て叩き潰す！」

十

「仮面の男・エルガだと！フツ」

堕天帝国城内、王の間。

部下の報告にアルマイルは驚くのではなく意味心な笑みを浮かべた。

「ようやく動き出したか！背徳の種。いや、あえて言い直そう人類初の墮天族と」

「どうなさいますか？」

「泳がせておけ。面白いモノが見れるかもしれんからな」

アルマイルはバルコニーに出ると目映い太陽を見上げた。

「さあ、奏でようではないか。世界に捧げる変革の唄を」

十

月が照らす夕闇の時。

エルステイナ城内・シーラの部屋に自身の背より大きな杖を持ち緑色した瞳を輝かせ人影が立っていた、シーラは気配を感じ起き上がると壁にかけていた剣・サウゲウスを握りその人物に向けた。

「何者です。名乗りなさい！」

「付き合つて貰います。無条件です」と、謎の人影はシーラの腹部に打撃を与え気絶させた。

十

両手を鎖で繋ぐ男・ユウキは部屋の窓から空を見上げていた。

「いったい何故。こうならないようにしてきたというのに！何が、狂っているというんだ！」

コンコンと部屋の扉が叩かれ女性が入ってきた。

その腕に赤子が抱かれていた。

「リルフィーナ。……。覚悟、しておいた方がいい」

「始まるのですね。父さま」

「ああ、オレにもしもの事があつたら、後のことは頼む」

「父さま！はい、アナスティアはきつと守ります！何かあるつとも」

十

クロムはシーラの自室の扉を叩いた。  
返事がない。

クロムは「入るぞ」と扉を開けるが部屋にシーラの姿は無かった。  
その変わりにシーラの剣・サウゲウスが床に落ちていた。  
クロムは頭をフル回転させ考えた。

その結果導き出された答え。

「墮天帝国！」と、クロムの顔が険しくなる。

「取り戻す！例え、どれだけの時間とどれだけの血を流すことにな  
るうとも、ゼツタイ取り戻してやる！」

十

「ここ、は？」

シーラが目を覚ましたそこは豪勢な部屋だった。変わっている事と  
いえば窓には鉄格子がされているくらいだ。

「お目覚めかなエルステイナの後継者よ」と、アルマイルが悠然と  
立っていた。その隣に女の子が並んでいた。

「っ！まさかここは墮天帝国！」

「正解だ。君にはクロムを呼び寄せるための餌となってもらおう」

「兄さまを呼び寄せるための餌？」

「ただここに居てくれればそれだけでいいのだよ。それとこの子は  
エレミナだ」

アルマイルの隣に並ぶ女の子がお辞儀した。

「君の身の回りの世話をしてくれる。何かあれば彼女に言うといい  
アルマイルはそう告げると部屋を出ていった。

シーラとエレミナだけ残された。

「私はシーラ宜しくね。エレミナちゃん」

「宜しく願います。エルステイナ様」

「何かその呼ばれかた恥ずかしいなあ」  
「では何とお呼びしたら宜しいでしょうか？」  
「じゃ、シーラって呼んでくれる。その方が私もうれしいから」  
「えっ、そんなお呼び方はできません」  
「いいじゃないフランクな方がいいじゃない」  
「ですが」  
「ここに階位なんて無いのよ。墮天内に私の立場なんて何の役にも立たない」と、シーラの瞳は悲しみを帯びた。その姿にエレミナは「シーラ、様。これで宜しいのでしょうか？」と、頬を赤らめ俯いた。  
「うん、ありがとうエレミナちゃん」

十

墮天帝国地下牢獄内。

鉄格子の中に長い耳を持つ魔族の男性と尖った耳を持つ神族の女性が捕まっていた。

「お似合いだな。我が子にして裏切り者よ」

アルマイルは男女を見下すように笑みを浮かべた。

「二年ぶりに顔を合わせるな。ゼルファード・ヴォルザクディオ・

デイガイト。及び、レニーシャ・シュヴァンテ・フライアよ」

「だから何だつていうんだ」

魔族の男、ゼルファードは言葉を吐き捨てる。

「我也嫌われたものだな。まあ、仕方ないことか。そういう風に振る舞ってきたのだからな」

「父様！何を考えているのですか？」と、レニーシャは疑問を問いた。

「これが最後の顔合わせになる。今後はもう逢うことは無いだろう。

だから話しておこう」

アルマイルは懐から一冊の書籍を出し鉄格子の中に投げ込む。

そして「全ては伝説の種族復活の為」と、続けた。

「伝説の種族？」

レニーシャは疑問符を浮かべるがゼルフアーダは立ち上がりアルマイルを見据えた。

「！アルナベルツ大陸の中央に存在する聖地・ユーフォニウム。今では聖域とされているがそこに居たとされる種族。だが、遙か昔に滅んだと伝えられている。そのはずだが」

「ふっ、その解釈は間違っている。滅んだのではない」

「墮界の書にはそう、記されていたはず！？」

「我執だな。それは伝えられている結果でしかない。後の者が真実を葬り記したのだ」

「真実を葬る？」

レニーシャとゼルフアーダは声を揃えた。

「滅んだのではなく滅ぼされたのだよ。神族、魔族、聖族、人族。

その四種族の統一国家によってな。後は創造詩を読んで勉強でもしている、時間はたっぷりあるだろ」

「四種族の統一国家？」と、レニーシャはあり得ないと目を見開いた。

「そんなの存在していたというのか！」

ゼルフアーダは否定したい気持ちで一杯だった。

今は伝説の種族の事よりも四種族による統一国家の事。

ゼルフアーダやレニーシャは産まれてこの方、種族間の抗争は当たり前だった。しかし、遙か昔に四種族の統一国家が存在していた。

そんな言葉を簡単に受け入れる事は出来ない。

「なぜ我々は争いばかり続けるのだろうな。一度は一つになろうとしたものを何故、武器を持ちこつても簡単に誰かを殺すのだろうな」と、アルマイルの瞳は悲しみを帯びていた。

「だが、我は武器を持ち討とう！覚悟はあるのだから」

「何を言っているんだ。アンタの言ってること矛盾だらけじゃないか！」

ゼルファードは訳が解らないと吠えた。

「嘘と真実の狭間にあるもの。」

それは、何かをなしとげようとする決意。

目に見える全て、

伝えられてきた伝承、

それらの真実が正しいとは限らない！」

「父様？もしかして・・・死のうとしてませんか？」

アルマイルは二人に背を向け地下牢を後にした。

十

墮天帝国領土内にセリティスの姿があった。

彼女は城内に入ると神族、魔族の前をごく当たり前のように通り過ぎていく。

セリティスは警戒されるわけでもなく彼女の存在の認識ができない。例えるなら幽霊だろうか。

どんなに神族や魔族に近づいても警戒されずセリティスは目的の部屋へとたどり着いた。

その部屋には何かの機械装置が並びそれから延びるケーブル、その先にはガラス張りの培養槽があった。培養槽の中には眠るように瞳を閉じている羽根ある女性がいる。

無数のケーブルが延び羽根ある女性に繋がっていた。

「・・・漸く、会えたわね・・・アムリア」

セリティスはガラス張りの培養槽に触れる。

「・・・一人で寂しかったでしょう・・・でも、もう直ぐよ。もう直ぐで・・・彼に会えるわ。だから、待っていて・・・」

「・・・」

羽根ある女性　　アムリアはセリティスの言葉に誘われるように目を覚ました。

「・・・セリティスッ！・・・」

セリティスとアムリア、二人は互いを求めあうようにガラス越しに手を合わせた。そして、誓いを立てるように言葉を紡いだ。

「・・・待ってる・・・ずっと、待っているから・・・そして・・・」

「ええ、還りましょう。私たちの還るべき場所へ」

「遂に来たか！一年、長かったぞ！」と、アルマイルは自室のバルコニーに出た。

「我ら二人で変革の唄を奏でようではないか！」

墮天帝国領土内にエルガの姿が会った。

待ちかまえていたと何百人もの墮天群がエルガを囲む。

エルガは剣帯に下げていたフリーディアとジャステリエの両の柄を握る。

「始めに言っておく、討たれる覚悟のある奴だけ向かってこい！でなければ退け！」

墮天軍は問答無用とエルガに向かっていく。

「バカがつ！」

エルガは真上に跳躍する。と、同時に握っていたフリーディアとジャステリエに黒い影が浸食し剣腹が黒い模様で色づく、そして、下に向け振り下ろすと、大きな黒いカマイタチのような技が繰り出された。

墮天軍は言葉にならない悲鳴を上げ倒れていく。

しかし、エルガは容赦なく続ける。

黒の鎌鼬、墮天群の悲鳴。

黒の鎌鼬、墮天群の悲鳴。

黒の鎌鼬、墮天群の悲鳴。

黒の鎌鼬、墮天群の悲鳴。

黒の鎌鼬、墮天群の悲鳴。

幾度となく続き、ようやくエルガの滞空が終わる頃には何百居た墮

天群は百を切っていた。

「……だから、始めに、言ったんだ。討たれる覚悟のある奴だけ向かってこいと、でなければ退け、と」

仮面を被っており表情は読みとれないがその声に悲しみが伺えた。

「バツ、化け物か！」

墮天兵の一人が呟いた。

「化け物……かつ。それもそうかもしれん、なっ！」と、「化け物」

と呼んだ墮天兵に向け黒い鎌鼬を浴びせた。その墮天兵は、胸から上が消え去ると切り口から大量の血が流れ落ち地に倒れた。

「吾に向かつてくるのであれば武器を持った時点で覚悟を決めておけ、それが《討つ》ということだ」

エルガは視界の先にある墮天城にフリーディアを向ける。

その行為は宣誓布告にもみえた。

十

鉄格子された窓からシーラは空を見ていた。

「どうしていつも空を見ているのですか？」と、エレミナは問いた。

「えっ……うん、それはね」

一度エレミナを見た後、再び空を見上げた。

「この同じ空の下に兄さまが居るから。そう思うと少し勇気がわいてくるから、もう少しだけ、頑張れるから」

「シーラ様」

「兄様は凄いいんだよ。言葉だけじゃ表せないほどに、ホントに凄いいんだ」

シーラは笑みを浮かべながらクロムの事をエレミナに話した。

「本当にお好きなんですね。お兄様の事」

「うん！世界で一番大切な人だよ」

一瞬の迷いもなくシーラは頷いた。

墮天城正門前。

大きな城門が仮面の男・エルガの前にあった。扉は頑丈に見える。その周辺の大地には墮天群が横たわっている。エルガに敗北したのだ。

エルガは城門に向け黒く浸食した右手のフリーディアで黒い鎌鼬を巻き起こし扉を破壊した。

破壊した扉の先にも大地を埋め尽くすほどの神族や魔族によって構成された墮天群。

「そんなに死にたいのか！バカがつ」

横一線に黒い鎌鼬を巻き起こし数十人の墮天群を一蹴する。

墮天群の持つ魔導機、法力機から圧縮した魔力や法力が一斉にエルガに放たれた。

エルガは右足を軸にし勢いよく軀を捻ると自身の周りに風が発生、その風は勢いを増し竜巻にも似た姿だった。

竜巻は墮天群の放った法力、魔力を全て跳ね返した。

「そんな小細工は効かない」

エルガは横一線にフリーディアを振ると黒い鎌鼬を発生させ墮天群をなぎ倒す。

「はあああああああ！」

続いて、左手のジャステリエを縦に振り下ろし黒い鎌鼬でなぎ倒す。「多い！だったらっ」

エルガの足元の影がまるで意志でもあるかのように四方に伸びていく、影から影に伸び続ける。

「自身の影に喰われる」と、エルガの声と共に墮天群は自らの影に沈んでいく。

「もう少しだ！もう少しで逢えるっ」

十

墮天城内・王の間。

アルマイルは座っていた椅子から立ち上がると部屋を出ていく。廊下を歩き、螺旋階段を上る。再び廊下を歩き目の前に表れた扉を開いた。

アルマイルの視界に入ってきたのは椅子に座り窓から空を眺める少女、シーラ・ベルマーレ・エルステイナ・アルナベルツ。

彼女はアルマイルの気配に気づき視線を外にやったまま口を開いた。「どれだけ待っても兄さまは来ません。国を、何百万という民を背負っているんです。わたしと国とを天秤に掛けたとき、その結果は決まっています。兄さまは来ませんっ」

「そうかもな。しかし、別の奴が来た。それを知らせておこうと思っつてな」

「別の方？」

「エルガだ！」

十

アルマイルが部屋を出ていってしばらくシーラは解らぬ疑問と葛藤していた。

どうして？

何故？

そういつた疑問がシーラの頭をかけ巡った。

どうして、エルガが、  
何故、エルガが、  
と、そんな疑問だ。

その時、沈黙を保っていたエレミナが疑う言葉を口にした。

「え？今なんて？」

「シーラ様をここから出させて差し上げます。お兄様に会わせて差し上げます」

エレミナは有無を言わず強引にシーラの手を引くと唯一廊下と繋がる扉に手を添えた。

その手がオレンジ色に輝き、瞬間 扉は破壊された。

「ちよっエレミナちゃん？」と、握られた手を振り解いた。

「お兄様に逢いたくはないのですか？」

「会いたい。会いたいよっ！でも、こんな脱走みたいなことっ」

「わたしがお聞きしたいのはただひとつです。お会いしたいのか、したくないのか？それだけです」

「逢いたくないのか」というエレミナの台詞にシーラは兄であるクロムとの思い出が頭をよぎった。

キャンパス向かい筆を走らせるクロム。

「わたしはっ」

シーラを背に墮天群に立ちはだかるクロム。

「兄さまにっ」

様々なクロムとの思い出。

そして、抱きしめてくれたクロムの温もり。

「逢いたいっ！」

シーラの決意にエレミナは笑みを返し手を差し出した。

「わたしを連れてって、兄さまのところへ！」

シーラはエレミナの手を取った。

瞬間、エレミナはシーラを背に腕を突きだしすとオレンジ色の防壁を作り出し青や紫の砲弾を防いだ。

「エレミナ、ちゃん」と、シーラはその背中を心配そうに見つめる。

『いつも、護られてばかり兄さまにも、エレミナちゃんにも・・・これは、わたしが人族に産まれてきた・・・宿命なの？』  
廊下の奥から墮天群が魔導機、法力機を手に現れた。

「我ら墮天族を裏切るのか？エレミナよ」  
「アルマイル様が遣ろうとしていることに納得がいかない、それだけ」

エレミナの躰がオレンジ色に輝いた。

「部下はただ命令に従ってればいいだけだ」そんな説明じゃ納得いかない。道を開けて下さい！」

「しかし、我らはアルマイル様に忠誠を誓った身そう簡単に開けるわけにはいかない」

「でしたら実力行使です」

刹那 シーラの視界からエレミナは消え代わりに視線の先に信じられない光景があつた。

何者かに攻撃を受け墮天群は次々と倒れ中には再び立ち上がるものですら容赦なく壁に叩き潰された。

全ては数秒の間だった何十居た墮天群は地に倒れその中でエレミナは一人立っていた。

「これ、エレミナ、ちゃんが」

「行きましようシーラ様」

十

墮天城内北部。

仮面の男、エルガが墮天群と交戦していた。

その手にはフリーディアとジャステリエではなく別の剣が握られていた。

エルガは魔導機から放たれた砲弾をなぎ払うと一瞬の内に懐に入り

心臓に剣を突き刺した。

「何なんだアンタは、我らに何の恨みがある」

墮天群の一人があまりの恐怖に口走った。

「知りたいか？知りたいのなら教えてやるう。吾の名はエルガ。これは吾が愛剣、月の剣 アムリアと太陽の剣 セリティス。吾が目的は貴様等に連れ去られたシーラの奪還だ！」

「月と太陽の剣？何故アンタが持っている」

「持っているから持っています。それ以外に何か理由がいりませんか？」と、少女が現れエルガに並んだ。

「緑色の瞳？聖族！エルガと手を組んだとでも言うのか？」

「苦戦しているようですが？お手伝いいますか？」

「後々のために力は温存しておきたい、頼むリーラ」

「分かりました」

リーラは持っていた杖、アンヴィバレンツを頭上に掲げると四つの宝玉が輝きを放ち球体の召喚陣が出現した。

「吾はリーラ・リースリオ・ピクリシア。その名において命じる。

出よ、アルガルド」

リーラの台詞と共に召喚陣はひび割れ、その聖獣は現れた。それは炎を纏った虎型の聖獣アルガルドが現れた。

「アルガルド、全部塵として下さい」

リーラの命令に聖獣アルガルドは口を開き炎を噴き出し墮天群は避ける間もなく一瞬の内に塵と化した。

「ふう〜リーラ助かった。ありがとう」

「いいえ。それではわたしはシーラさんの捜索に戻ります」

「ああ、頼む」

墮天城内南部の廊下をシーラとエレミナは走っていた。

しかし、突然シーラは足を止めエレミナもつられて止める。

「ねえ、エレミナちゃん。後でも良いことなんだろうけど、もしかしたらもう訊けなくなるかもしれないから訊いてもいい」

「はい、察しは付いています。わたしの力のことですよね」

「そう、神族の法力は青色

魔族の魔力は紫色

聖族の聖性は緑色

墮天の魔法力は青紫色

それぞれの種族の力には色があるでもオレンジ色なんて今まで見たことがない。あれは何なの？」

「わたしの使ったあれは《腺功》<sup>せんこう</sup>です」

「《腺功》？初めて訊く言葉。それは一体なに？」

「神族の法力、魔族の魔力、聖族の聖性、墮天の魔法力。

それらは全て大気中に存在する聖性を内に吸収し、それぞれの力に変換して使っているんです。即ち自身の中にある内なる力ではありません。その為、勘違いしている者は多いです」

「違うの？」

「はい、ですが腺功は完全に内なる力。全種族使え内や外に展開することによって攻撃や防御。全てに使えるんです」

「全種族使える？それじゃ人族も」

「目覚めさえすればシーラさまでも使えますよ。それが《腺功》です」

カツーン、カツーンと廊下の先から足音が響いてきた。

エレミナは腺功を手に纏わせ警戒する。しかし、その者の口から出た言葉に耳を疑った。

「あなたがシーラさんですか？お迎えに上がりました」

「アナタ、誰です？」

エレミナは腺功を走らせたまま警戒した。

「エルガからの使いの者、リーラ・リーズリオ・ピクリシアです」  
「シーラは解らぬ疑問をリーラに投げつけた。」  
「何故！どうしてエルガが私を助けようとしているのですか？」  
「・・・アナタは真実を知らないそうなのです」と、淡々とした  
面もちで返した。  
「真実？一体何があるのですか？」  
「直接本人に伺う方が宜しいのではないですか。アナタをエルガに  
会わせるそれがわたしの役目です。それで、そちらのお方にお願  
いがあるのです」と、リーラはエレミナに視線を送った。

十

東部の螺旋階段をエルガは黒い模様が浮かび上がる剣を手に墮天群  
と交戦していた。

一歩ずつ敵をなぎ倒し登る。

「何処から沸き上がってくるんだコイツ等」

とりたて、墮天群が強いわけではない。しかし、湧き出てくる数に  
よってエルガの体力は削られていく。

刹那　突然、エルガの視界がオレンジ色の光で満たされ無数にい  
た墮天群は倒れていた。

「一体何が？」

エルガは今日の前にある現状を把握しようとして頭をフル回転させた。

「今のは腺功変形・流星翔じゆうせうです」

頭上の方から声が響きエルガは顔を上げた。

「アナタがエルガですか？」

突如、声を開けられ足を止め剣柄を握る。

警戒態勢のまま周りを見渡し気配を探ると階段の上に少女、エレミ

ナが立っていた。

「アナタに敵意はありません。リーラさまからアナタに伝言を頼まれました」

「リーラ？それは誰の事だ？」と、疑問符を浮かべた。

「北部と訊いたのですが東部に移動していたのですね」

リーラの言葉にエルガは疑問符を浮かべ続ける。

「取りあえず伝言をお伝えします。『西部の大広間で落ち合いますよ』との事です」

「意味が解らない！」

「シーラさまがお待ちです。そうお伝えすればお分かりになりますか？」

「シーラが？」

「ええ！偽りではありません」

「そうか。ありがとう！」

エルガは階段を駆け上がりエレミナの横を通過していった。

十

西部の大広間。

「まだ、来ないんだ」と、シーラは一人真実を知ると思われる人物、エルガを待っていた。

「周りの様子を見てきます。待っていて下さい」

リーラは告げるとシーラを残し出ていった。

「わたしの知らない、わたしの真実。わたしに何かあるというの？」  
シーラは高い天井を見上げた。

十

墮天城中央部の大広間。

エルガは扉を蹴破った。

「威勢がいいな。エルガよ」

部屋の中央でアルマイルは立ち待っていたような口調でエルガを誘う。

「アルマイル！お前の支配も企みも全て終わらせる！」

「勝てるか？我らに！」

「この腕が覚悟の証だ」と、エルガは腕を突き出した。

一時の静寂が流れる。

刹那 エルガは剣を抜きアルマイルに挑んでいく。が、アルマイルはエルガの剣を軽々と交わす。

「かるい！そんな太刀で我らを止めるなど片腹痛いわ！」

「ぐっ！」

アルマイルの気迫の衝撃で後ろへと追いやられた。

しかし、エルガは剣を握り直すと再び挑んでいく。

十

西部の大広間。

広い部屋でシーラは一人で待っていた。

自分の知らない自分を知る者を、自分に隠された真実を知る為に待っていた。

カチャツ、と音を立て大広間の扉が開く、シーラは誘われるように振り返る。

そこには、見知らぬ・・・いや、フードマントを羽織りフードを深く被る怪しい奴が自身より大きな鎌を手に立っていた。

「あなた、ですか？」

フードの者は有無も言わずに鎌で空を斬ると、鎌の中央にある宝玉

が輝いた。

「契約に違ひ吾が命に応えよ」

宝玉から炎が現れひとつに集まり何かを模っていく。

「アルガルド！」

虎だ。

炎を纏った虎。

「化け物！」と、シーラは後ずさる。

フードの者は鎌をシーラに向けると炎の虎　アルガルドは口から炎を吐き出した。

その炎はシーラの周りを取り囲んだ。

「いったい何を企んでいますの？」

フードの者は無言のまま何も言わない。

シーラは炎を挟んでフードの者を睨んでいた。

その時、シーラは炎の中の映像に気が付いた。

そこには、自分の知らない、自分が映っていた。

「・・・わた、し・・・？」

その映像にはクロムと背中合わせに墮天群に向かう姿。

噴水中央広場で口ゲンカしている姿。

路地裏で男二人に絡まれている所をクロムが助けてくれる姿。

記憶に無いシーラにとっては信じられない光景だった。

「・・・わた、し?・・・」

「ええ。正真正銘アナタの過去の記憶です」

「知らない・・・記憶」

フードの者は再び大鎌を空に掲げた。

「今から、アナタの封印された記憶の封緘を破ります」

アルガルドが突然、引き裂かれたように四方八方に粉碎しシーラの視界には炎の塵だけ残された。

そして、炎の塵はシーラの中に入っていくと彼女は立ったまま金縛りにあつたように動かなくなった。

金縛りから解けたのかシーラは膝をついた。

「……………そう、これが、私の本当の記憶……………偽れない記憶……………」

「どうですか？記憶を思い出されて」

フードの者は静かに問う。

「誰だか存じませんが有難うございます」

「では、思い残すことはありませんね」と、フードの者は大鎌を振り上げた。

十

勢い良く大広間の扉を開きエルガが駆け込んで来た。

「シーラッ！」

エルガは大広間を見渡しシーラを捜す。

そして、エルガは床にある《それ》に気が付き駆け寄った。

「……………シーラ？……………誰が、こんなつ……………」

エルガはシーラを抱き起こすとシーラは微かに言葉を紡ぐ。

「……………クロ、ム？」

シーラの言葉にエルガは仮面を取り乱暴に投げ捨てその素顔を現わにした。

漆黒の髪と瞳を持つ青年、クロム・ベルマーレ・エルステイナ・アルナベルツ

いや、本名はクロム・ヴァルシオネ・ケインツベル。

「シーラ、俺は此処に居るぞ」

「よかった。最期に話せて……」

傷は右肩から左横腹を斜めにかけて刃物で斬り裂かれていた。傷口から真っ赤な血液が止めどなく流れ躰から出ていく。

クロムはその傷を見ただけで、嫌な予感を感じた。

「最期じゃない！今すぐ」

シーラはクロムの手を握りクロムの言葉を切った。

「わたしね、記憶が戻ってすごく怖かった。偽物の兄妹。記憶のない人たち。みんなが嘘、ついてる。世界中が……わたしを睨んでるような気がして……クロムはこんな世界で、一人で戦ってたんだね。たった一人で、だからわたしは、クロムの現実になって、あげたいって……」

「シーラ！」

「わたし、クロムが好き、クロムが今遣ろうとしてる事を訊いても嫌いにはなれなかった。クロムがずっと守ってくれていた……それでもまたクロムを好きになった。記憶をいじられても、また好きになった」

「駄目だ！死ぬなシーラ！」

「何度生まれ変わっても、きつとまたクロムを好きになる。これって運命だよねっ」

「死ぬな！シーラ、死ぬな！死ぬな！」

「だから、い、いよね。生まれ変わっても、また、クロムを好きになっても、何度も、何、度……も……」

握っていたシーラの手から少しずつ力が無くなっていき、

そして、ゆっくりとシーラの瞼が閉じられた。

「あっ、シーラ？シーラ！」

眠りについた。

そう、眠りについた。

二度と目覚めることのない永遠の眠りに……

「くっくっく……うあああああ！」

クロムは泣き叫んだ。

感情を止めることなく、

愛する者を失った悲しみとの慟哭と、

護れなかった自身への怒りの怒号、

それらを乗せ泣き叫んだ。

「シーラさま？」と、エレミナが大広間の扉を恐る恐る開く。

クロムはエレミナが入ってきた事に気づいた。

「シーラを、頼むっ」

エレミナに一言言い残すと大広間を出ていくと眼前を見据え険しい顔で怒りを現わにした。

「アルマイル！！！！」

クロムは復讐の鬼と化し中央部を目指す。

「必ずに、絶望の闇に叩き落してやる！！！！！！！！」

十

中央部の大広間の扉がクロムによって乱暴に蹴破られた。

「遅かったな」と、言わんばかりにアルマイルは立っていた。その傍らにクロムの義父であるユウキが倒れている。

「父さん！」

倒れているユウキに駆け寄り寄るクロム。生きている事にホッとするとアルマイルに向き直る。

「エルガ・・・いや、クロム！」

「貴様の野望もこれまでだっ！」

刹那　クロムは自身の影からフリーディアを抜き出すとアルマイルに向かつていく。

「以前と同じ事を貴様に言ってやるっ。」

「うっさい！オレは貴様を闇に叩き落とすそれだけだ！」

ギンツと金属同士の音が鳴り響く。

アルマイルが剣を出現させクロムの攻撃を防ぐ。

「お前の信じるモノのために向かってくるがいい、それを完膚無きまでに叩き潰してやるう！」

十

荒廃したエルステイナ城の中庭、枯れることなく今も花を咲かせていた。

そんな中、セリティスは両腕にそれぞれ赤子を抱いており不意に空を見上げる。

「・・・失った生命はもう二度と戻らない。そんな中でアナタは何を望むの・・・」

十

アルマイルはクロムをはじき飛ばす。と、不意に自分に問いかけるように呟くと、口元をほころばせた。

「駒は揃った。もういいかつ」

刹那　クロムは好奇とばかりにアルマイルに突っ込むと切り上げ軀を宙に浮かせ、両腕に自由の剣・フリーディアと正義の剣・ジャステリエを突き刺し壁に張り付けた。

「これで終いだアアアア！」と、クロムは加速をつけ床に突き立っていた月の剣・アムリアと太陽の剣・セリティスを握りアルマイルの腹部にその二本の剣を突き刺した。

「ハアツハアツハアツ」

クロムは肩で息をし呼吸を整える。

壁に張り付けられたアルマイルは唸りを上げ大量の血を吐き出した。  
「・・・世界は、人類は、変わらなければならぬ。新たな道を切り開くために・・・」だから我は、世界を支配し、その上で貴

様に殺されようと考えた」

「何を、言っているんだ」

クロムは言葉の意味が理解しきれず疑問を浮かべた。

「……エルステイナの継承者が殺されたのは、計算外だったかな……」

「？お前の差し金じゃなかったのか！」と、クロムは目を見開いた。

「貴様になら世界を任せられる。伝説の種族、その最期の生き残り」

「！知って、いたのか？」

「……種族名、《光輝》。光を操る力を持ち……」

我々より遙に長寿」

「お前、そこまで」

「先祖の間違った選択により滅ぼされた種」

「そんなものは関係ない！俺はシーラさえ側に居てくれればそれで良かった。それが、オレの最大の望みだったんだ！」

「……クロムよ。世界つて一体なんなんだろうな」

アルマイルは不思議な謎かけをクロムに投げた。

「世界？世界は世界だろ、俺達の生きているこの大地の事だろ」

「悩み、考える、お前にも必ず解かる時が来る」

「一体なにが言いたいんだ！」

「伝説の種族、光輝の末裔、クロム・ユーフォニウム・ヴァルシオ

ネ・アルナベルツ。人類を、いや、世界を頼むっ」

「アルマイル！」

クロムは悟ったアルマイルが死にゆく者であると……

だからこそ、アルマイルは伝えるべき事をクロムに伝えているのだ  
った。

「『来るべき対話』の……為につ……」

アルマイルは謎の言葉を残し逝ってしまった。

何か大きな真実をその胸に秘めたまま、

クロムに期待を抱いたまま、

アルマイルはその人生に終止符を打った。

十

クロムはシーラの身体を抱きかかえ墮天城から出て来た。  
沢山の屍をその足に感じながらクロムは墮天城を後にする。  
クロムの後を追うようにエレミナは追いかけていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3437z/>

---

アルナベルツ戦記 First Priority 世界の果てで響く終焉唱

2011年12月11日23時06分発行